

伊丹福音ルーテル教会 聖霊降臨後第十七主日礼拝のしおり
2021年9月19日

前奏：

聖名による挨拶

牧師：父と御子と聖霊の御名によって。アーメン。

会衆：アーメン。

牧師：主よ、わたしのくちびるを開いて下さい。

会衆：そうすれば、私の口はあなたのほまれを告げるでしょう。

一同：父と御子と聖霊の神に、栄光が、初めにそうであったように、
今も、そしてとこしえまでもありますように。アーメン。

招きのことば：詩編 54 編 6-9 節

見よ、神はわたしを助けてくださる。主はわたしの魂を支えてくださる。

わたしを陥れようとする者に災いを報いあなたのまことに従って彼らを絶やしてください。

主よ、わたしは自ら進んでいけにえをささげ 恵み深いあなたの御名に感謝します。

主は苦難から常に救い出してくださいます。わたしの目が敵を支配しますように。

罪の悔い改めと赦しのことば：

会衆： 私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。

私たちは祈ります。私たちを救うため あなたがお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。（短い黙祷を持ちましょう）

牧師： 何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言します。父と、御子と、聖霊のお名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。

アーメン。

使徒信条

われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくんだり、三日目によみがえり、天にのぼり、父なる全能の神の右に座したまえり。生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、かぎりなきいのちを信ず。 **アーメン**。

祈り

愛とあわれみに満ちておられる私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。今朝も礼拝で救い主であり主であるイエス様が私たちにお仕えくださいます。私たちにご自分のいのちを与えてくださいます。私たちも今週も自分の思いを遂げるのではなく、人々と幸せを共有する一週間をすごせるように、どうぞ導いてください。

今週もビデオやプリントによって、私たちは別々のところで同じ礼拝にあずかります。このために力になってくださった方々を祝福してください。

新型コロナ・ウィルスの感染が拡大しています。緊張感を保ちながら、その中でも御手にゆだね確信をもって、あなたの子どもとして安心して生き生きと生きる日々を与えてください。

この祈りを、私たちの救い主であり主であるイエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン**

使徒書朗読：ヤコブの手紙3章13-18節

あなたがたの中で、知恵があり分別があるのはだれか。その人は、知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい。しかし、あなたがたは、内心ねたみ深く利己的であるなら、自慢したり、真理に逆らうそをついたりしてはなりません。そのような知恵は、上から出たものではなく、地上のもの、この世のもの、悪魔から出たものです。ねたみや利己心のあるところには、混乱やあらゆる悪い行いがあるからです。上から出た知恵は、何よりもまず、純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐れみと良い実りに満ちています。偏見はなく、偽善的でもありません。義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです。

福音書朗読：マルコによる福音書9章30-37節

一行はそこを去って、ガリラヤを通過して行った。しかし、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは弟子たちに、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」と言っておられたからである。弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。一行はカファルナウムにきた。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。「わたしの名の

ためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

説教：「仕える者になりなさい」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

すべての人に仕える者になりなさい、とイエス様はおっしゃいました。弟子たちには理解できないことでした。弟子たちは反対に考えていました。弟子たちは人よりも先に、人の前を歩き、一番偉い人、誰よりも立派な人になることが人生で大切だと考えていました。弟子たちには燃えるような向上心や、厳しい競争を覚悟で自分を律し鍛えようという闘志がありました。弟子たちは価値ある人生は偉い人になることだ、と考えていました。これからイエス様が救い主としてイスラエルの国をもう一度立て直し、立て上げ、立派な国にしてくれるなら、自分もそこで精進して人の上に立つ人になろう、と凛々しい考えを思っていました。

イエス様は弟子たちに、人々はわたしを誰というか、と尋ねられましたね。弟子たちは、周りの人々がイエス様のことをやがて来る救い主の道備えをする人だとか、人々に歩むべき道を教える預言者だと言っていることを報告しました。イエス様は、ではあなたがたは私を誰というか、と続いて尋ねられるとペテロが代表して、イエス様こそメシア、救い主です、と告白しました。イエス様、あなたは誰かや何かの備えをするお方ではなく、あなたご自身が来るべき救い主です、と告白しました。イエス様がメシア、すなわち救い主ご自身です、という信仰告白です。

そのあとイエス様が救い主として、エルサレムで祭司長や律法学者といわれる当時の政治、宗教を含むすべて国民の安全と将来を託された人々に排斥されて殺されること、そのあと三日の後に復活することを語られるとペテロはイエス様を脇にお連れして、そんなことがあってはいけません、と諭そうとしました。イエス様はペテロに対して、弟子たちみんなを見ながら、それは人間のことを考えて神のことを考えていないサタンのお考えだ、下がれ、サタン！と厳しく一喝されました。イエス様が救い主であるというのは弟子たちにとってはイスラエルの国を復興する王としての期待でした。当時ローマ帝国の属国になっていました。昔のダビデ王国のような世界を支配する国を再現してほしいと願っていました。人間として求める救いは、今苦しんでいることを解決していただくこと、解決していただけるなら自分も精一杯力を尽くすということでした。イエス様はそれを、人間のことを考えて神のことを思わない姿です、と言われたのです。

では神様のことは何でしょうか。神様は悲しんでいます。人はどんなに国として一時的に権威を持ち自由になっても、それを生かすことができないのです。むしろ人のひとりひとりの幸せが罪によって奪われているので、その罪が赦され、神様のもとに立ち帰って、神様の子ども

としての新しいいのちに生きるようになってほしいのです。そのために来てくださった救い主がイエス様です。

私たち人間のうちから出てその人を汚す罪、みだらな思い、プライドやどん欲のための殺意や盗みや悪口やねたみや無分別の数々の悪が問題です。人が神様から離れて自分中心、わがままな心で生きていることが神様の悲しみでした。

また人はお互いにわがままなので、そのことを前提に生きていかなければなりません。互いを信頼できず傷つけられないように警戒し、互いに利用されたり裏切られないように恐れて心の壁をつくります。自分の不幸せはすべて世の中のせい、人のせい、運命のせいなのだから自分は犠牲者にならないように、むしろ世にあって自分の願いがかない、自分に有利に、自分の考える幸せを手にして、したいことができるような自分に心地よいようにものごとが運ぶように、と望んでいます。

そのあとイエス様はペテロとヤコブとヨハネという三人を連れて山に登りました。そこでイエス様は輝く姿になりました。弟子たちはイエス様がその右と左に出現したエリヤとモーセと語り合うのを見ました。そして神様の声で、イエス様がわたしの愛する子である、イエス様に聞け、と言われるのを聞きました。神様がお遣わしになったイエス様が、旧約聖書の待ち望んでいたまことの救い主であることを弟子たちは目の当たりにしました。

そのあと、山から下りてみると群衆の中からひとりの人が歩み出て、イエス様に自分の息子を癒してほしい、と願いました。子どもを癒してくださったあと、イエス様は弟子たちと歩きながらまた、ご自分が殺されて、三日ののちによみがえることをお話になりました。弟子たちにはまだ、イエス様の権威ある教えや癒しのお姿と、イエス様が引き渡されて殺されてしまうとおっしゃる姿の違いを理解できませんでした。それで道々弟子たちは自分たちのうちで誰が一番偉いのか、と議論していたのです。権威あるイエス様が、立派に国を復興させてくださるとき、だれがどんなポストに就くのだろうか、と考えていたのかもしれませんが。イエス様がどんな意味で救い主であるのか、これだけの経験をしても、まだ弟子たちにはわからなかったようです。

イエス様は家についてから皆を集めてお話になりました。「一番先になりたい人はすべての人のあとになり、すべての人に仕える人になりなさい。」とおっしゃいました。弟子たちの考えていたことと反対でした。すべての人の後になる、すべての人に仕えるのは、人生のみじめな敗北者のような姿に映ったのではないかと思います。そんなことをしていたら置いていかれる、そんなお人よしの心構えでは人に利用される、と反射的に考えます。

イエス様は続けます。家にいた子どもを真ん中に立たせ抱き上げました。わたしの名のためにこのような子どものひとりを受け入れるのはわたしを受け入れるのであり、わたしを受け入れるのは父なる神様をうけ入れるのだ、と言われました。子どもを邪魔扱いせず真ん中に立たせ、

さらに子どもを見下さずやさしく同じ目の高さに抱き上げて下さって、この子どもを神様もイエス様も大切に思っているのがこの子をわたしのために受け入れる人は神様を受け入れる人である、と言われます。弟子たちはイエス様のことばと行動にさぞ驚いたことでしょう。

今の時代は子どもは大切にされています。当ても子どもは親にとっては大切でかわいいのです。ですからイエス様のもとに病気の息子や娘を癒してください、と必死で親は求めました。しかし社会では子どもは役に立たない世話のやけるお荷物と考えられていて、人の数にはいろいろな邪魔者のような扱いでした。イエス様は、神さまは子どもを大切にされる、その子どもをあなたがたも大切にしてください、と言われます。神さまは、どんな人も大切にします。だからあなたも自分が偉くなるためには、何の利益にならなくてもむしろどうして自分がこの人と関わらなければならないのか、邪魔だな、と思う人でも、それは神様が大切にしておられる方々なので、進んでその人の役に立ち、その人が幸せになるように、できることをすべてしなさい、仕えなさい、と言われました。自分中心でわがままな思いから、なんとか自分たちは幸せになりたいと願っていた弟子たちには大きなショックでしたでしょうね。この驚きと、そんなことは無理だ、と感じた弟子たちの感覚はあなたにもわかりますでしょうか。

それは、戦いのような毎日であっても、少なくとも、とりあえず、身内には優しい心を持ちなさい、という程度のことでありません。また、心に余裕のあるときは、しっかり小さなものたちに目をとめて配慮をしてあげなさい、そのような心の余裕を持ちなさい、というのでもありません。何をしても自分の得になること、自分を守り自分の思いがなることを中心に考えないで、神様が大切にされている小さな方々とどのように幸せを共有できるかを常に考えて歩むことです。家庭でもめんどろなことをみんなの役に立つなら喜んで担うことです。職場でも単に自分たちの利益をあげるためではなく、ただ人に役立つことを追求し、そのために自分たちを鍛え、常に「人々のために」というところから目が離れないように律し、さらに、よりよく人々に仕えることができるように体制を整えて、魂を込めて力を尽くすのです。

そうだな、それが大切だな、と思うことができても、私たちの心はバネのように自分を守り、自分の得すること、楽なことを考えるように戻っていきます。罪びとだからです。自分中心だからです。わがままだからです。神さまはあなたがそのように実は無力で、神様の前に誇るものが何もないことをご存じです。

立派な王国ができ、そこで立派にすべての人の上にたって支配する夢をかなえても、自分の心が自己中心で、神様が大切になさる人を犠牲にはしても大切にすることはせず、いつも慢心しているなら、人のことを思って神のことを思わない姿です。神さまはあなたにそのような救いを与えるためにイエス様をお送りになったのではありません。

イエス様は人々に捨てられ、十字架につけられ、三日目によみがえられました。人々は自分の願いを満たしてくれないような救い主は救い主ではないと考えて、イエス様をはりつけにして

殺してしまいました。イエス様はそのような人々の罪のために十字架につけられました。しかしイエス様からすると、そのようにして人々の罪のために、人々の罪を担って、十字架についでくださったのです。神さまを信じれず、自分の幸せを確保したい人々の恐れと焦りと怒りのすべてを、イエス様はそこで担って死んでくださいました。イエス様は、小さなものである私たちひとりひとりを受け入れて大切に、私たちの罪の裁きを代わりに受けて下さいました。私たちはイエス様の名前によってただしく神さまに罪を赦されたのです。

このイエス様の赦しを信頼して洗礼にあずかる人は、イエス様が三日ののちによみがえってくださったそのいのちにもあずかります。イエス様があの小さな子どもを抱き上げて、喜んでお仕えになったように、今週も私たちにも神様のいのちを生きる大切な一週間が与えられています。私たちが話すこと、思うこと、することが、神様の大切になさっている人々と幸せを共有するための工夫に満ちた歩みになります。私が自分自身を守らなくても、イエス様が守ってくださいます。恐れることはありません。むしろ神様が大切になさっているおひとりひとりを、私たちもすすんで、喜びをもって、報いを期待せずに、後ろに立って支えて進み、お仕えしていきましょう。

弟子たちはこのときはまだよくわかりませんでした。神のことを思わず人のことを思っていました。でもその弟子たちを大切になさったイエス様はあなたをも大切になさっています。そしてあなたがイエス様に、あなたは救い主です、と告白する信仰のなかみを、さらに修正して、人のことをおもわず、神のことを思う信仰に育てていってくださいます。

イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」 マルコ 9:35

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくださいます。アーメン

讚美歌 268 番 1-3 節

1. 真心もて仰ぎまつらん、世のためのろいの木につきたまいし 救いの主(ぬし) わが主よ
2. わが罪とが 汚れもみな 洗いて、今よりのち 君のものとなさせたまえ、わが主よ
3. いと豊けき 恵みをもて 冷えたる わが心に きよけき火を 燃やしたまえ わが主よ **アーメン**

主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。みこころの天になるごとく地にもならせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。われらを試みにあわせず、悪より救い出されたまえ。

国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

頌栄：讚美歌 541 番

父、御子、御霊のおお御神に ときわにたえせず み栄えあれ み栄えあれ **アーメン**

祝福の言葉

仰ぎこい願わくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しきお交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、豊かにありますように。 **アーメン**

後奏